

# 最優秀賞

ふれあい賞

## 僕と福祉とヘルプカード

伊勢原市立伊勢原中学校

一年 細田伊織

今、僕は福祉について考えている。

そこにはある出発点があるからだ。

真っ赤なカードに「十字のマーク」と「白のハート」。それを聞いてすぐに「ヘルプカード」を頭に思い浮かべてくれる人は、どのくらいいるのだろうか。

僕の母は今、ヘルプカードをつけて外出している。持病があり年齢を重ねることに悪化していく。

最近までは混んだバスや電車で立っていたし、むしろ席を譲るといふ行動で、僕にでもできる社会への優しさへのお手本だった。

「心配り」や「心配り」を母から学んだ。

しかし最近になって、母は駅の階段を登りきることが難しくなった。階段を降りきることでも大変になった。予定していた電車に乗れなかったことも一度や二度ではない。急行電車は混んでいるので各駅停車で座って外出することも増えた。でも、それが僕たち家族にとっての日常だ。

そんな矢先、僕たち家族はヘルプカードの存在を知り手にした。

果たしてこれをつけて外出するかどうか。僕たち家族は悩み話し合った。なぜなら、母がそれをつけることをためらっていたからだ。

母は、

「本当はその日、体調が悪いのに外出している人もいる。見えないだけで手助けや配慮を必要としている人もいるかもしれないのに、ヘルプカードをつけているという理由だけで恩恵を受けるのは気が引ける。」

と言った。僕は最もらしい理由だと思った。一方で、母は気丈に振る舞うことで自分を保っているような気もした。

父は、

「身体が悪いのだから、気づいてももらうためにも、つけるべきだ。」

と言った。確かにそうだ。誰だつて自分のことで精一杯なのは当たり前だから、何もせず気づいてもらうのは難しい。それに、母が電車やバスで座っている前に、身体の不自由な

方などが来た時に、席を譲れない母の立場と罪悪感をヘルプカードが代わりに伝えてくれるかもしれない。

姉は、

「ヘルプカードが社会に周知されていないのが現状で、必要な人がつけることで社会に認知してもらおう、その第一歩、先駆けとしてつけることに大きな意義がある。」

と母を説得した。姉の意見もその通りだ。電車の優先席を示すステッカーの横に申し訳なさそうに貼られたヘルプカード説明ステッカー。どれだけの人に目に止まるだろう。ヘルプカードの意味をどれだけの人が正しく答えてくれるか。

今、ようやく社会に認知され始めたからこそ、母が正しく使い理解を深めてもらうことは大切だ。

僕はこの家族の話し合いを通して、福祉の考え方に「生きる」というテーマがある以上そこに正解はないのではないかと思った。

少し前の僕の福祉は「優しさと思いやり」だと思っていた。それも正解だ。

けれど今、母の病気の悪化で出会ったヘルプカードを通して福祉の考え方が変わった。

皆で支え合うことが福祉ではあるけれど、現実には支えられる重さも在り方も、その人それぞれだ。

でも、福祉をそれぞれの立場の人で担い合っていると考えたら、自分にできることをやればいいと解釈できる。無理は必要ない。

母は堂々とヘルプカードをつけて外出し、母に何か手助けできるゆとりのある人はそれをしてくれたり母は助かる。  
僕が行き着いた福祉は、無理をせず自分ができることをすること。どんな立場の人も、その人らしく。そして僕も僕らしく。

